論 文 要 旨

2024 年　2 月　26 日

都市イノベーション　専攻	氏名	丹羽 梓
論文題目	公立ホールと芸術ジャンル−沖縄に向けられた本土からのまなざしを通じて−	
和訳または英訳	The relation of public halls and art genre: through the perspective towards Okinawa from Mainland Japan	

本論は、公立ホールと芸術ジャンルとの関係を本土からのまなざしを通じて明らかにするものである。文化会館や市民会館などと呼ばれる公立ホールは全国各地に設置されている。そこで実施されている事業は、本土では西洋芸術音楽に基づいたものが多く、沖縄では沖縄芸能に基づいたものが多い。沖縄の公立ホールで沖縄芸能が実施されるのは、沖縄の公立ホールが本土から沖縄イメージやオリエンタリズム的なまなざしを向けられているからである。

第 1 章では、本論の研究対象と研究目的、援用する理論、用語の定義を述べる。まなざしとは、歴史的、社会的に構成された枠組みを通して対象を認識する見方である。そして、このまなざしを分析するために、ミシェル・フーコーの権力論を援用する。権力とは、さまざまな関係性の中で生まれる至る所に発生する下からの権力のことである。さらに本論では、権力を沖縄イメージとオリエンタリズムという 2 つの概念を使って検討する。

第２章では、公立ホールとはどのようなものであるかについて、定義や歴史から検討し、法律と国立劇場設置によって芸術ジャンルによる違いが作られたことを指摘する。芸術ジャンルの扱われ方には、法律が大きく影響している。人々は国立劇場の設置や法律によって、芸術や芸能は振興するものであり、伝統芸能は保存するものとしてまなざすようになった。

第３章では、日本のホールの変遷を概観し、日本に多く作られている多目的ホールは権威と権力がせめぎあって作られていることを指摘する。公会堂は集会施設として設置された場所であるにもかかわらず、舞台芸術の上演場所として利用された。これによりオーケストラピット等を備えた西洋芸術音楽に適した多目的ホールという現在の一般的な公立ホールの形態が生まれた。それは、西洋芸術音楽が高級な音楽であるとまなざされていたことが関係している。

第４章では、全国初の公立の音楽ホールと、日本復帰時に沖縄で要望された公立ホールから、戦後の民主主義のあり方と芸術ジャンルが関係していることを指摘する。本土では西洋芸術音楽、沖縄では沖縄芸能のホールが住民から要望されたが、これは、戦後に GHQ やアメリカ軍によってこれらの芸術ジャンルが奨励されたからである。このような戦後の民主主義のあり方が公立ホールの芸術ジャンルにも影響を与えていた。

第５章では、現在の沖縄の市町村立ホールについて、本土からどのようなまなざしが向けられているかについて検討する。沖縄の市町村立ホールでは、沖縄芸能などの沖縄らしさが様々な形で強調されている。それは、本土からオリエンタリズム的なまなざしを向けられているからである。

第６章では、那覇市民会館には日本に同化したいという当時の沖縄県知事の思いが込められていること、その後、本土からのまなざしによって沖縄イメージが作られていることを指摘する。那覇市民会館は、沖縄を日本化させる装置として機能していた。そして、沖縄国際海洋博覧会を契機に本土によって青い海美しい島という沖縄イメージが作られ、こ

の沖縄イメージは、沖縄の基地問題を覆い隠す役割を果たした。

第 7 章では、1990 年代に設置された沖縄の施設は、沖縄知事の日本への同化を望む気持ちが沖縄の独自性として表現されたことを指摘する。西銘は、沖縄コンベンションセンターと県立郷土劇場を設置した。この２つの施設は、沖縄に対するオリエンタリズム的な沖縄イメージを活用した施設である。西銘は、沖縄が日本の一部になるために、本土からのオリエンタリズム的なまなざしを利用して沖縄の独自性を強調した施設を設置した。

第８章では、国立劇場おきなわの設置は、本土と沖縄どちらにもメリットがあり、そこには今までとは少し異なる権力が生まれていることを指摘する。国立劇場おきなわは、本土にとっては、沖縄が日本の一部ではあるが日本そのものではないということを示すため、そして沖縄にとっては、日本の一部として認められたということを示すためという利点があった。また沖縄は、2000 年頃から本土に頼らない自立的発展をめざすようになったため、沖縄のまなざしの質が変化した。

第 9 章では、沖縄の公立ホールが本土からのまなざしに対して従順だったわけではなく、実は沖縄の要望を通すために本土からのまなざしを利用していることを指摘する。沖縄は地域の文化である沖縄芸能を他の芸術ジャンルよりも非常に重視しており、それを発展させるために、本土の沖縄に対するまなざしを活用している。

第 10 章では、まとめとして、沖縄の公立ホールと芸術ジャンルの関係は、本土からの沖縄に対するオリエンタリズム的なまなざしや、法律や政府の政策という権威、そして沖縄の住民の要望という権力などの影響を受けていることを指摘する。沖縄の公立ホールと沖縄芸能の結びつきは、本土が沖縄に対してどのようなまなざしが向けられているかが大きく影響していた。つまり、公立ホールでは、芸術ジャンルの質とは全く関係ないところで、芸術ジャンルが選ばれ利用されているのである。

４，０００字以内